

『パンナムビルのPCカーテンウォール』

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 環境学専攻 助教授・博士(工学)

清家 剛

高層ビルのカーテンウォールが印象的な映画といたら、みなさんは何を思い浮かべるだろう。超高層ビルの火災をテーマにした「タワーリングインフェルノ」(1974年)や、ハードアクションの「ダイハード」(1988年)を思い浮かべる人が多いかもしれない。映画の中で特にアメリカ映画の中では、印象的な場面で高層ビルがたびたび登場する。その中でもカーテンウォールに注目すると、私にとっては、なんといってもアルフレッド・ヒッチコック監督の「北北西に進路を取れ」(1959年)である。この映画自体が好きだということもあるが、特筆すべきは、そのオープニング画面なのである。

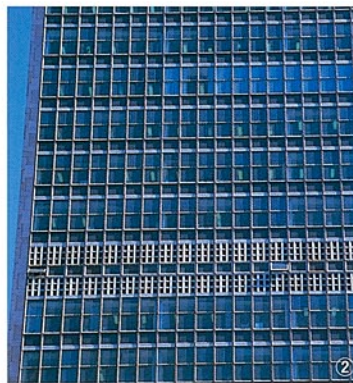
この映画の最初は、うすい緑の背景に画面の下と右からバースのきいた並行線が数10本伸びてきて平行四辺形の格子状の背景画面を完成させる。そこに格子に沿って右上がり斜めになった文字が上から下へと降りてきて、主演のケイリー・グラントらの名前を表示したあと映画のタイトル「North by Northwest」を表示する。その背景の格子が、やがてニューヨークのミラーガラスのカーテンウォールの格子にぴったりと重なるのである。ニューヨーク名物の黄色いタクシーが多数映し出されたカーテンウォールは、自然に背景画面であり続け、残りの俳優やスタッフの名前を表示し続ける。やがて場面がいくつか転換して、映画のストーリーが始まるのである。

この映画が発表された1959年は、現代的なカーテンウォールの最初といわれる国連ビルが建設された1950年から9年たっており、数々のガラスの摩天楼がニューヨークに林立しはじめたころである。そしてミラーガラスのカーテンウォールが、現代的なイメージの素材として切り取られ、背景として使われているのである。だから私にとって最もカーテンウォールが印象的に使われた映画なのです。

さて。物語はめまぐるしい展開でやがてその国連ビルへと場面を移す。主人公はそこで殺人事件に巻き込まれ、犯人扱いされ逃亡することになる。ここで国連ビルの話の少々。ル・コルビュジエ

が基本構想をまとめ、W.ハリソンらの設計による国連ビルは、現代的なカーテンウォールの最初のものに位置づけられている。アルミニウムの本格的なカーテンウォールは、その後のカーテンウォールの元になった歴史的なものである。(写真①,②)

やがて映画は国連ビルからシカゴへと場面を移し、さらにラピッドシティ



へと移動して、ラシュモア山の歴代大統領の巨大彫刻を舞台にクライマックスへと向かっていく。この映画のタイトル、「North by Northwest」という意味ではない。直訳すると「北へ、北西を経由して」ということになろうか。タイトル通り、ニューヨークの中、シカゴ、ラシュモア山と、一貫して北西の方向に進んでいる。また別に訳すと「ノースウエスト航空で北へ」とも読める。主人公が北へと進む中で唯一飛行機を使ったのがシカゴからラシュモア山のあるラピッドシティまでなのだが、もち

ろんノースウエスト航空で移動している。

はじめてこの映画を見た中学生の私は、何の疑いもなく「北北西」=「North by Northwest」と暗記してしまっていた。北北西が「North North West」だと知ったのは高校に入ってからである。では、北北西は誤訳かという、この映画のタイトルはハムレットの「私の狂気は北北西の風のときに限るのだ」という台詞からきているので、北北西というニュアンスも含まれるのだろう。しかし、当時のこの邦題で映画を見た人のどれくらいが、主人公が実際にシカゴから「ノースウエスト航空で北へ」向っているというレトリックを意識していたのだろう。なぜならそのころの日本では、ノースウエスト航空があまり知られていなかったのではないかと想像するからである。少なくとも1970年代後半の、中学生の私は知らなかった。そしてその当時知っていたアメリカの航空会社といえばパンアメリカン航空、つまりパンナムしかなかったのである。そのパンナム社の名前の



清家 剛 TSUYOSHI SEIKE

東京大学大学院 新領域創成科学研究科
環境学専攻 助教授・博士(工学)

1964年 徳島生まれ

1987年 東京大学工学部建築学科卒業

著 書:「ファサードをつくる」「新ファサードシステム」

「カーテンウォールってなんだろう」を共著

好きな俳優:ハリソン・フォード、ドナルド・プレザンス、ピアース・ブロスナン

付いたビルが、ニューヨークのど真ん中、グラントセントラルステーションの隣にあるパンナムビルである。そしてこのビルは、ニューヨークに建設された本格的なPCカーテンウォールの最初の建物なのである。

(写真③~⑥)

まえふりが長くなってしまったが、今回の話は国連ビルでもなくノースウエスト航空でもなく、パンナムビルである。もちろん、パンナムビルだって様々な映画の中に登場する。マンハッタンのもいえる場所にあるので、ニューヨークの代表的風景として登場するのはたびたびだし、アメリカ版「ゴジラ」(1998年)では、かわいそうなことにゴジラにビルの真ん中を突き破られてしまっていた。

さて、1963年に建設されたこのビルは、バウハウスの創設者の一人であるワルター・グロピウスがファサードデザインに関わり、ニューヨークの大手設計事務所エメリー・

ロス・アンド・サンズが設計した。そのPCカーテンウォールは、骨材洗出しの単純なパネルである。都会の真ん中という場所柄もあって、現在は大変汚れているが、アメリカではこうした汚れはさして気にしていないのか、清掃することもなくそのまま使われている。一度だけビルの室内から見学したことがあるが、実際に内部から見てもそれほど目立つ汚れではない。

(写真⑦,⑧)

さて、このビルの建設時とはほぼ時を同じくして、1964年には日本でも赤坂中央ビルなどでPCカーテンウォールが実現する。当時の雑誌の記事を読むと、アメリカではPCカーテンウォールが非常に高価であり、日本でもそのうち高くなるといった文章がある。(詳しくは「ファサードをつくる」p36)実際にアメリカでもニューヨークやボストンでは、現在でもあまりPCカーテンウォールは使われない。しかしアトランタなど中部地域では、石の代用品として盛んに使われている。アメリカは広い国土を有しているの、重量の大きなPCについては、地域による違いが大きいようだ。

さて、ここまで「パンナムビル」と連呼してきたが、この名称の使い方は、実は正確ではない。1990年代前半に、「パンナムビル」の名称は、「メットライフビル」になった。ビルの文字も大文字でかっこいい「PANAM」から、小文字混じりの「Met Life」になってしまった。なんでもともと生命保険会社のメットライフ、つまりメトロポリタン・ライフ・インシュアランス社がビルの最大手

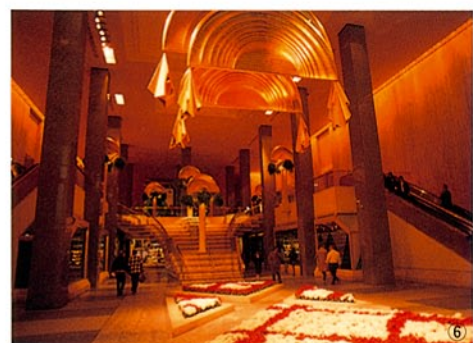
の所有者だったが、当時低層部に入居していたパンアメリカン航空社の社名をビル名としたらしい。その後すぐにパンナムは出ていったが、ビル名は変えずにいたという。しかしとうとう1990年代に入ってパンナムという会社そのものがなくなることになり、メットライフに変更したという。同じようなことはロックフェラーセンターのRCAビルがGEビル、AT&Tビルがソニービルという具合にニューヨークだけでも枚挙に事欠かない。不動産の売買が激しいアメリカでは、こうした所有者が変わっても不思議ではないが、看板も変わるとなると、ビルの印象まで変わってしまう。さらに建築屋としては、そこそこと建物の名前を変えられては困る。従ってオリジナルのビル名を表記することが原則となろう。そうでないと、数年後にはこの原稿も「何のこっちゃわからん!」ということになってしまうからだ。現時点で正確に表記するとしたら、「パンナムビル(現メットライフビル)」または「メットライフビル(旧パンナムビル)」のどちらかだろう。あめんどくさい。

(写真⑨,⑩)

さて、パンナムビル(現メットライフビル)からパンナムの看板は無くなり、単なる歴史上のビル名となってしまった。中学生の私が知っていたパンアメリカン航空は今はなく、私の知らなかったノースウエスト航空は残っている。アルフレッド・ヒッチコックには、新世紀まで見通す先見の明があったが、パンナムという看板をつけた人にはなかったのか、な～んて、まさかそんなことまでは考えられませんか。



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

写真① 国連ビル

写真② 国連ビルのメタルカーテンウォール

写真③ エンバイアステートビルから見たパンナムビル

写真④ パークアベニューから見たパンナムビル

写真⑤ グランドセントラルステーション側から見たパンナムビル

写真⑥ パンナムビルの低層部の内装

写真⑦ パンナムビルのカーテンウォール

写真⑧ パンナムビルのカーテンウォール

写真⑨ エンバイアステートビルから見たメットライフビル

写真⑩ パークアベニューから見たメットライフビル